86　モーイ親方（ロ）
（勉強・薩摩の難題）

親方は今でいえば総理大臣でしたよ。お父さんが。子どもがまたヌーハのモーイ。あれは名前は何て言ったかね。これがまた、頭は切れるがねぇ、人のあれとは全く違っておる。昼はもう遊んでばっかりいる。鶏を持ってね、方々歩いて鶏を喧嘩さして。また、勉強はね、人に見えないところで、床下で。

それで、薩摩からね、これはもう、税金ということで問題を持ちかけてきたわけさ。島津公から。雄鳥の卵を持って来なさいと、雄鳥。一番目は。それから二番目は、与那原というところにウンタマムイという森がある。その森を根本から持って来なさいと。それからまた三番目にね、灰で縄を綯って持って来なさいと。灰で縄を綯えるわけがないでしょう。

それでもう、三司官、大臣たちはもう困ってね、「こういう問題が来ておるがどうしよう、どうしよう」と、誰もが解決できないわけさ。それを床下で聞いてね、モーイは入って来るわけさ。

「お父さんたちは何でこんなに心配してね、物事を相談しておるか」と聞いた。

「実はね、薩摩藩からこういう問題を持ちかけられておるから、すぐ持って来なさい。」

「じゃあね、あんたたち役人の方々は心配しないで、代わりに私がね、行って来る」。

で、薩摩に行ったらね、もう島津公、藩主から偉い方々集まって、その前に出て、

「琉球藩の何々ですが、お父さんの代わりに私が来ました」って。そうしたら向こうが怒ってね、

「何であんたが。お父さん来なさい。琉球王来なさい。また、三司官来なさいというのにあんたが来たか」と叱られたって。

「実はね、お父さんはお産だからね、来られないから代わりに私が来ました」。それを言わん前にね、雄鳥の卵持って来たかと言ったので、

「これはどういうことか」と。したら、

「ああ、これはいい」ということになって。

二番目はウンタマムイ持って来る。

「実はね、ウンタマムイは、根っこから崩して桟橋まで持って来てあるが、それを運ぶ船が琉球にはない。それを運ぶ大きい船を薩摩藩から出して下さい」と。あるわけないでしょう。これも一釘刺して、

「もうこれはいい」って。

で、三番目はね、

「灰の縄持って来たか」。灰の縄といったらもう難しいでしょう。だから、藁で綯ったあれを皿の上に載して燃やしたら、灰は綯われたまま残るでしょう。これが灰の縄。綯ったままワラ縄を燃やすんだから灰になって、綯ったままの形であるでしょう。これが灰縄になった。

「ご褒美は、何でもいいから好きなものを、望みを言うてくれ」と。それはね、

「一分でもいいから薩摩の藩主にさしてくれ」と。すぐ側の重役連中は足をどんどんさして、今にも切り殺されようとするが、島津公が、

「これはね、男の約束だから、これの言うことを聞きなさい」と。で、モーイ親方がいっとき薩摩の藩主の座についたわけさ。

「これからね、沖縄の証文を持って来なさい」と言った。そしたらもうそれらを燃やしたわけさ。
「藩主の言うことを聞かなければ。私が藩主よ、今は」とすぐ指差して言うわけさ。島津公もね、
「ああ、もう恐れ入った」と言って。
「私の願いはこれだけ。じゃ、本当に、私としてもこうして琉球の藩を代表して来たんだから、こういう、今から後はできるから、財政的な援助をしないように。証文も燃やしたから何も駆け引きないよ」と。

字与座　伊敷清保